

## ロンドン・ナショナル・ギャラリー展

国立西洋美術館 2019. 03. 03～06. 14 国立国際美術館(大阪) 07. 07～10. 18

イギリス「ロンドン・ナショナル・ギャラリー」は世界有数の美術館で、最大の特徴は王室の収集を母体とした多くの欧州の美術館とは異なり、1824年に国家制定法により設立された美術館で、“13～20世紀初頭までのヨーロッパ主体の様々な画派を網羅した「約2,300点の作品」を所蔵していること”である。

今回日本で公開されるのは、イタリア・ルネサンスから20世紀までの幅広い時代とジャンルに及ぶ西洋絵画の傑作「約60点」の作品である。



ファンセント・ゴッホ 《ひまわり》 油彩/カンヴァス 1888年

南仏アルルで描いた「花瓶に生けたひまわり」の作品のうち、ひまわりシリーズの4点目にあたる絵画で、画伯の後期の作品では非常に珍しい“朗らかな心を感じられる作品”で、本邦で初公開となるため注目されている。

ヤン・ファン・エイク 《アルノルフィーニ夫妻像》 1434年 パネルに油彩

この名作は、“半透明で艶のある薄い顔料を幾層にも塗り重ねる手法”で仕上げた作品で、結婚を寓意するこの敬虔な市民像画は、二人の全身像が描かれた背面の壁に掛けられた鏡に映し出される反転した情景が、極めて独創的で複雑な構成を持った生き生きとした色調で現実味を与える。世俗的な財産と富裕さを描き出した「錯視的技法」は室内の空間を表現した光の表現には定評がある。

ピエロ・デッラ・フランチェスカ 《キリストの洗礼》テンペラ 1453～60年頃

最初期の代表作で、画面半ばの高さに地平線を、空には白い雲と一層の白い鳩を青く澄んだ空に配し、観る者の方に向かって流れるヨルダン河の岸辺一本の胡桃の木が、河の中央には合掌する「キリスト」が描かれている。

後方には月桂冠、花冠、宝玉冠を付けた「三天使」が立ち、対岸では右足を河に踏み出した「ヨハネ」が右手をあげて、キリストの頭上水を注ぐ姿が克明に描かれている。 ロンドンの「ナショナル・ギャラリー」の常設展示品は、作品の貸し出しが厳しくてこれまで館外で展示されることは一度もなかったため、本展はまさに“歴史を覆すような展覧会”であるとされている。